

高次脳機能障害者における Work-ability Support Scale (WSS) 日本語版の開発—内容的妥当性の検討—

北上守俊¹⁾、稲葉健太郎²⁾、高野友美³⁾、峯尾舞⁴⁾、小泉智枝⁴⁾、西村仁美⁵⁾

- 1) 新潟医療福祉大学 作業療法学科
- 2) 名古屋市総合リハビリテーションセンター 自立支援部
- 3) 障害福祉サービス事業 わかばの家
- 4) 北原国際病院 リハビリテーション科
- 5) フロイデ工房 しろさと

【背景・目的】 障害者の就労支援のランダム化比較試験に関する国内の文献レビューからは確認出来なかったとされている(岩重ら 2012)。就労支援の実態に関する研究報告は散見しているが、エビデンスレベルの高い研究は乏しい。その一因として簡便かつ定量的に評価する尺度が無いこともエビデンスが蓄積しにくい一因であると考えられる。

本研究では、2013 年に脳損傷者等への就労の評価尺度として国外で開発された「Work-ability Support Scale (以下、WSS) (Fadyl J et al 2015)」の日本語版の内容的妥当性を検討することを目的とした。

【方法】

(1) WSS 原版の構成

Part A と Part B の 2 部で構成され、Part A は身体的側面や認知的側面、社会的/行動的側面の 16 項目 (合計 112 点満点)、Part B は個人要因や環境要因、職場復帰への障害の 12 項目 (合計 12 点満点)、総合計 124 点満点からなっている。Part A の採点は、1 点～7 点の 7 件法、Part B は 1 点・0 点・-1 点の 3 件法である。

(2) WSS 日本語版の開発準備

WSS の翻訳作業は、原著者の日本語版作成の許可後に、翻訳業者によるバックトランスレーションを行なったものを原著者に送付し、内容の妥当性に関する確認を受け完成させた。

(3) WSS 日本語版の内容的妥当性の検討

高次脳機能障害者の就労支援が 5 年以上の保健医療福祉専門職の支援者 5 名に、WSS の Part A 16 項目と Part B 12 項目の内容について「保持」「修正」「削除」の択一式で回答を求めた。3 名以上「削除」と回答した項目は項目から削除し、回答者から修正を指示された箇所はすべて修正した。また、項目の追加に関して、追加後に再度回答者内で検討し上記と同様の作業を繰り返し実施する。

(4) 倫理的配慮

本研究は、本研究は新潟医療福祉大学倫理委員会の承認 (承認番号: 18325-191220) を受け、関連する利益相反はない。

【結果】 WSS の内容的妥当性について 5 名で検証を行った。職種は作業療法士 3 名、社会福祉士 1 名、言語聴覚士 1 名である。実務経験の平均は 170.4±46.6 カ月で、高次脳機能障害者の就労支援経験年数は、129.2±50.6 カ月であった。性別は女性 4 名、男性 1 名で実施した。

Part A は、16 項目中 2 項目が回答者 5 名とも全て「保持」と回答し、そのほかの 14 項目は修正が必要となった。また、『認知機能』や『言語機能』、『接遇/マナー』の項目を細分化したり、『自己理解』、『精神面の安定』、『作業能力』が新たに追加となり、合計 10 項目が追加された。

完成した WSS 日本語版の構成を表 1 に示す。

Part B は、12 項目中 2 項目が回答者 5 名とも全て「保持」と回答し、そのほか 10 項目は修正が必要となった。

Part A の採点は、『5 点・6 点・7 点』で一部内容を加筆・修正し、『0 点・1 点・2 点・3 点・4 点』の項目は回答者 5 名とも全て「保持」であった。Part B は、3 項目とも回答者 5 名全て「保持」との結果であった。

表 1 WSS 日本語版 Part A (左)・Part B (右) の構成

身体的側面		個人要因	
1	粗大運動	1	自信
2	身体/運動	2	プライベートの支援
3	巧緻動作	3	意欲
4	バランス能力	環境要因	
5	感覚/知覚	5	雇用主との連絡
6	移動	6	雇用主の意向
7	体力/ペース配分	7	職業上のサポート/リハビリ
認知的側面		職場復帰への障害	
8	認知機能	8	問題となり得る可能性のある生活活動
9	注意	9	経済的な問題
10	記憶	10	法的な問題
11	計画/実行力	11	その他のプラス要因
12	問題解決	12	その他のマイナス要因
13	言語機能		
14	言語表出 (書きを含む)		
15	言語理解 (読解を含む)		
社会的/行動的側面			
16	時間管理		
17	接遇/マナー		
18	身だしなみ		
19	言葉遣い		
20	安全性		
21	クライアント/顧客		
22	同僚		
23	上司/管理者		
24	指摘/変更		
25	自己理解		
26	精神面の安定		
27	車椅子/復作業		
28	確認・手帳作業		
29	作業能力		
30	判断工夫を伴う作業		

【考察】 内容的妥当性の検証の結果、WSS の原版から高次脳機能障害者の就労を考えていく上で重要になってくる『認知機能』や『言語機能』、『接遇/マナー』を細分化したり、『自己理解』や『作業能力』の評価項目を新たに追加することでクライアントの全体像を捉えやすい評価ツールになったと考える。

一方で、評価項目を細分化したり、追加したことで評価項目数が増え、評価者の負担増加につながる懸念もある。今後、臨床的妥当性を検証していく中で、上記の懸念事項についても項目の吟味を平行して行っていく。

【結論】 高次脳機能障害者に対する就労支援のエビデンスを蓄積していくために WSS 日本語版の内容的妥当性の検討を行った。

その結果、WSS の原版から『認知機能』や『言語機能』、『接遇/マナー』を細分化したり、『自己理解』や『作業能力』の評価項目を新たに追加され、クライアントの全体像を捉えやすい評価ツールとなった。